



「言葉は同じ、平和的解決」でも、日本とペルーでは意味が違うのがよくわかった。でも終わったようでいて、何も終わっていない気がする」

沖縄在住の日系という立場からは、否応なしに様々な社会問題と直面せざるを得ない。「触れるのか、避けるのか。どちらも間違っていないけれど、ぼくは自分の問題として引き受けていきます」

声高にメッセージをぶつけるのではない。「歌うことがだれかの励ましになると信じている。明るい歌もつらい歌もだから必要なんだ」。あくまで前向きなのがディアマンテス流である。

山内浩司

BOOK

フランス版村上龍

映画「ディーバ」で知られる、というより、最近はお父さんといった

方が通りのいい俳優リシャール・ポーランジェ。

フランスで十年前に出版され、百三十万部のベストセラーになったエッセイ『ブルー』が、村上龍の訳で、『幻冬舎文庫』から発売された。

「人生よ、僕はおまえのなかにもっと入り込みたい。無邪気にも、まだ明るいうちに、僕は燃え上がりたい」

詩を挟みながら、アルコールとドラッグ、女たちとの日常が、生々しくつづられている。フランスでは、ストーリーキッズのような若い人たちを中心に読まれた。

俳優のほかに脚本家、映画監督、歌手とさまざまな顔を持つポーランジェだが、

「書くことは自分にとつて一番大切。俳優は他人の言葉しか話らない。それだけじゃ悲しいから」

それに加えて、

「映画は何百万人もの支援が必要だが、本は五万人が買ってくれば十分。より自由に表現できる」

とはいうものの、出版社と契約したのは三十年前。契約金の三万円は飲んでしまい、書き上がるまでに二十年もかかった。

仲宇佐ゆり



Photo 佐藤 麗 (上) 山内浩司 (中) 仲宇佐ゆり (下)